第 6 回アジア共同体講座

「アジア共同体：巨視的歴史と文化的焦点：11 世紀と 12 世紀の 2 つの国際盟約」

第 6 回講座は、韓桂華史学部長を招き、「アジア共同体：巨視的歴史と文化の焦点 - 11 世紀と 12 世紀の 2 つの国際盟約」をテーマに講演を行いました。韓史学部長の講演要旨は次のとおりです。

21 世紀の今日、ビジネスが活況を呈しており、技術が開発されており、インターネットの利用は広範囲に及んでいます。国と国との間を遮るものはないため、国境を越えて地域組織の締結と持続可能な開発が求められています。

現在、西欧と北米の統合協力が生まれ、中南米とアフリカの地域協力機関が出現しています。またアジア地域も崩壊せず東南アジア、東アジア、南アジアは共通の経済団体を持っています。2009 年には、中国、日本、韓国を ASEAN 10 カ国とインド、オーストラリア、ニュージーランドと組み合わせた「東アジア共同体」、さらには「アジア共同体」の提唱さえありました。アジア共同体は、経済的・文化的な共同体としての地域同盟を形成しています。地域の多くの国、多くの民族、多元文化、それらはいかにして特異性を残しながら同一化に向かい、長期安定を維持できるか？各共同体が直面し解決しなければならない問題になります。

巨視的歴史の観点から見ると、アジア共同体は遠大な目標と高い理想を持っており、実行されるなら、地域と人類にとって幸福をもたらすでしょう。共同体の経済協議や協力の形式に加えて、より重要なのは、この地域に内在する文化に焦点を当て、取り上げていくことです。共通の文化的意義と共通認識という中核的価値が備わって初めて、地域共同体は深化し、長く維持していくことができます。

例えば、10 世紀と 12 世紀の中国の歴史にあった宋時代、北辺の敵遼と金によって締結された「澶淵の盟」と「紹興の和議」が挙げられます。条約前後の両国の関係と情勢の発展、すなわち戦争から和議へ、そして長期的な平和が維持された理由と影響を分析した結果として、「礼儀、誠実、平和、繁栄」の形の条件が整って達成されたという好例です。

最後に、今日のアジア共同体を巨視的に捉えると、多文化主義と信仰は障害ではないと信じていますが、協力、焦点化、沈静化させ、文化の精粋を取り出し、人間性の美と善を発揚し、地域の安定と繁

栄を促進、さらには世界の大きな調和さえも期待できます。

韓所長の専門は宋の歴史と経済史であるため、先生は 10 世紀と 12 世紀の 2 つの「平和条約」の透徹した見解と独自の分析をもっています。宋時代は歴史上、軍事力の中で最も弱い王朝だったという印象を与えますが、しかしそれは文化の中で最も輝かしい時代でした。周囲の強国が虎視眈々と環視している中で、生き残りと発展のためには、弱国は、国際的な外交手段に頼らなければなりません。強国との間に相互不可侵条約を結び、戦争を回避し、友好親善の道を開き、互いに勝ち残るという局面を作り出さなくてはなりません。おそらく当時、国を屈辱とする不平等な条約と見なされたでしょうが、巨視的な見地からはその代わりに何百年もの平和が可能となり、国民を戦争の苦しみから免れさせることになりました。10 世紀から 12 世紀にかけて宋朝と北方の敵国である遼と金に、それぞれ締結した「澶淵の盟」と「紹興和議」は、その好例です。 むろん当時も後世も、この 2 つの「平和条約」についての評価は分かれています。しかしながら一般的には、「澶淵の盟」については肯定的な見方がなされています。「澶淵の盟」の締結後、宋と遼の間ではおおむね約 120 年間平和を維持しました。その間、経済的および文化的な面で絶え間なく交流が行われています。こうして両国は経済と文化の絶頂期を築きました。

しかし、その後、金が勢いを増したため、宋（北宋時代）は遼が滅び、宋はついには金から逃れられず、滅ぶことになります。現代的に言えば、金は二番手の敵である宋と連合を組み、主敵（遼）を攻撃し、その後二番手の敵である（宋）を攻撃したことになります。有名な「靖康の変」がこの時に起こりました。北宋滅亡後、康王趙構は応天府（河南省商丘）で元号を建炎と改め、高宗として即位しました。高宗を滅ぼすために、金は再び南侵しました。高宗は金に追われ、長江の南に、さらに海に逃げ、最後には、金人が水の戦争に苦しんだことから国の半分を手放し、宋と金双方は「紹興の和議」を締結しました。「紹興和議」には 2 つの和平交渉がありますが、内容は宋が金の臣下になることであり、その結果は宋の滅亡へとつながりました。その後の条約改正では、「易君臣之稱，為叔姪之國，宋主稱金主為叔父，兩國文書，改表詔為國書」現代的に言えば、この関係は、国と国の間の対等の関係に改訂されていま

す。「紹興和議」は不平等な条約であるが、両国は平和を得て経済的・文化的交流を生み出しました。最後に、蒙古の台頭のために、宋朝（南宋）は同じ過ちを繰り返しました。それは金を排除するために蒙古と連合を組んだのですが、蒙古の滅亡の運命を避けることはできませんでした。

これら 2 つの平和条約の共通点は、平和共存の時を得て、両国間の経済的、文化的交流を発展させたことです。特に、文化交流は、文化（遊牧文化と中原文化）の融合と、相互の文化を取り入れることとなりました。簡単に言えば、それは北方民族の漢化と漢族の周辺民族化です。上述の宋は軍事力の弱い国ですが、文化の強国です。文学と芸術において、中国の歴史上、大変興隆しました。したがって、遼であれ金であれ、漢化は積極的に推進されています。

特に、金王朝の多くの皇帝は、幼少から漢文化教育を受け入れ、執政時には漢化政策を積極的に推進しました。さらに金朝の漢化は徹底していて、南宋と対峙していた時でさえ、いままで北朝と自称していないにもかかわらず、金の君臣はまるで金が中国の「正統」であるかのように振る舞っていました。この「世界の正統」という考え方は、まさに漢人の伝統政権での中心的要素であります。金国人曰く「藍より出でてなお青い」と。それは、かえって宋朝の地位が金の属国の位置にあるようにも見えます（韓所長の PPT より）。金人の漢化は、表面的な衣装の飾りではなく、思考全体の変化であることがわかります。文化交流の影響力も見て取れます。

まさに結論として韓所長が述べたように、「盟約の基調を保持しながら、双方の外交、経済、文化、習慣のあらゆる面で交流往来が続いた」「かろうじて条約は締結されているが、両当事者の評価は同等か不平等であるが、これによって長期的な社会の安定と地域の平和を得たことは、当代と後世の一致した評価である」

戦争が起こるのと比べて、人々はより平和を渇望しています。平和な環境の下でのみ、経済と文化の交流を進めることができます。相対的に、経済と文化的交流と進展の上で平和は維持することができます。

『歴史を今の鑑として現在の世界情勢を見るなら、いかにして世界平和を追求していくかという「巨視的歴史、文化の焦点」は、参考にし、熟考する価値のあるテーマである』と語りました。私たちが求めているアジア共同体で、いかにしてコンセンサスを構築するかは重要な課題です。最初の 2 回の講座では、「言葉の

壁」を越えることの重要性を学びました。韓所長の講演を聞いた後、私たちがもし「文化の壁」を越えたいならば、文化交流と融合によって、誰もが同じく認めることができる文化基盤を築くことができるということを学びました。これに基づいて、互いを認め合い、お互いの内心の「障壁」を取り除くことが非常に重要です。

この講義は多くの収穫がありました。（原稿：陳順益）